

極限物性研究の面白さ知る

この春、ようやく任期付きポストから解放された。学位取得後に会社を辞めて20年が経過していた。4機関でポストを11年間、任期付准教授を9年間勤めた。1枚では収まりきれない履歴書を書いていると、数行で完結する他人のきれいな履歴をうらやましく感じる。

けれど、悪いことばかりでもない。ポストク時代に高圧力の科学と技術に出会い、極限物性研究の面白さを知り、現に研究の主軸となった。上司たちの計らいで、プロジェクト

凛としていきる

理系女性の挑戦

リケジヨの進路選択支援



研究の傍ら博士課程の研究課題だった炭素の研究にも挑むことができ、今もライフワークとして継続している。前任の新潟大では、グラファイトの室温下圧力誘起水素貯蔵をつきとめた。「水素はどこまで何をしているのか」という疑問が芽生え、次は数層グラフェンで試すことにした。ナノテクノロジーを使わずにグラフェン積層を数える方法を明らかにし、特許出願、論文発表に至ったところで岩手大への赴任となった。今は開店準備中である。

長年、研究者生活が続いていると、ライフイベントもなく、自分が結構な年をとって夏に学校で女子中高生が留学生と国際交流

いることを忘れていた。40歳を過ぎ、気候が慣れない日本海側で暮らすことになり、体力を過信していたこと、よりよく気付いた。「更年期が終わる頃このままぼんでしまうのか」と不安に思い、母親に経験談を聞いた。「時期が過ぎれば、またそのうちやる気も出てくるよ」という言葉を信じ、焦らずにこの状況と付き合うことにした。しばらくして、その言葉通り徐々に気力・体力が戻り、気持ちにも余裕がもてるようになった。

女子中高生の理系進路選択支援「女子中高生夏の学校」には、知人の紹介がきっかけで、3年前から携わることになった。高校生

の时分に自身のキャリアパスについて明確な答えを持つていない人は、一方、興味があるのに、勉強の得手・不得手だけで進路を選択するのはとても残念なこと。だから、少しでも進路選択のヒントが得られる場が提供できたらと思っている。日本の理工系大学で学んでいる女子留學生の考えや経験をもっと多くの人と共有したいと思

△(火曜日掲載)岩手大学理工学部 物理・材料理工学 科教授 中山 敦子



△(プロフィール) 96年(平8)東工大院理工学研究科化学専攻博士課程修了。国際基盤材料研究所、物質工学工業技術研究所、産業技術総合研究所、物質・材料研究機構、名城大、新潟大を経て現職。